長編小説

# 山鳴り

吉田知子

読売新聞社

山鳴り　長編小説　九八〇円

著　者　吉田知子

編集人　酒井堅次

発行人　二宮信親

発行所　読売新聞社

東京都千代田区大手町一の七の一　〒一〇〇

大阪市北区野崎町七七　〒五三〇

北九州市小倉北区明和町一の一一　〒八〇二

印刷所　大日本印刷株式会社

製本所　協和製本株式会社

第一刷　昭和五十一年三月二十日

第二刷　昭和五十一年四月二十日

©吉田知子　昭和五十一年　落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

0093—701960—8715　Printed in Japan

# 山鳴り　目　次

第一章　失恋ホテル　7
第二章　不吉な顔　15
第三章　怪鳥たち　27
第四章　アメリカン・クラッカー　38
第五章　紫陽花天使　56
第六章　新緑　68
第七章　水底　86
第八章　月と百五十円　94
第九章　その晩　106
第十章　満月　120
第十一章　館山寺行き　127
第十二章　どくだみ　144
第十三章　ながい午後　157
第十四章　反都会人　166

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第十五章　雷鳴　177
第十六章　怨念血染河原　190
第十七章　山百合　203
第十八章　人身御供　224
第十九章　秋雨　246
第二十章　秋涼　255
第二十一章　薄明　264
第二十二章　小春日和　274
第二十三章　悪夢　282
第二十四章　大字観音経　288
第二十五章　紅葉　297
第二十六章　狂い咲き　304
第二十七章　劫火　317

装丁　菅　木志雄

# 山鳴り

長編小説

# 第一章　失恋ホテル

高葉佑介は時間通りに待合せ場所のホテルへ来るとは限らなかった。三十分以上遅れることもあった。はじめの三、四回は彼らは一緒に〈失恋ホテル〉へ来たが、あとでは別に来るようになった。宮森光子が外国語学院をやめたからだった。

それでも予約はしてあるので光子はフロントへ名を告げるだけで部屋へ通される。案内のボーイは三人いて、その中の一番若い少年とは顔なじみになった。

〈失恋ホテル〉のエレベーターは旧式らしく、決った階に床面を合せて、きっちりと停めるのには相当の技術が必要だった。新米のボーイは、エレベーターの床面と廊下の高さを合せることができず大抵十五センチぐらいちがった。

すると彼は思わず舌打ちをし、たちまち顔を赤くして

「すみません」

と言う。

部屋に這入ってすぐの右手にバスルーム、左側がロッカーで、その奥のツインベッドの横に二人用の応接セットが置いてある。五百円高い部屋だと、多少室内が広くなり、書きもの机とフロア・スタンドがつく。

ベッドカバーはクリーム色の地にグレイの太縞で、室内には色のついたものといっては、それしかなかった。スタンドの傘もシーツも毛布も、みな白だし、椅子は黒革である。

サイドテーブルの上の時計は動いていたためしがなかった。ソファのバネは、こわれかけていると思ったほうが間違いない。うっかりして勢いよく腰をおろすとストンと下まで体が落ちて立ちあがるのに苦労する。

「ようやくわかったわ。どうして〈失恋ホテル〉って言うのか。このホテルの、なんだか間が抜けてて少し物悲しいとこ、他の言葉では言いようがないわね」

と光子は佑介に言ったことがある。

「皆そう言ってるな。おれたちの間じゃ。本当の名を言う奴なんか、いやしない。それでいて、案外人気がある

んだ、ここ。ほら、見てごらん」
佑介はベッドの脚を撫でた。
「こんなところに凝った彫刻がしてある。あの古くさい形のスタンドだってそうだ。テーブルも灰皿もカーテンも全部ちがうだろ、新しいホテルとは。出来合いじゃないんだ。余分なところに金がかけてあって肝腎なところに用がたりない」
「そういうのがいいんですか」
「失恋者にはね」
佑介の話題は抽象的なことが多かった。そのうえ、彼はどんな話にも理屈っぽい解説を加え、結論をつける。光子の悪口で言えば〈説教節〉であった。
光子の話のほうは、はじめは他人のことばかりだった。地下鉄の中で執拗に彼女にすり寄ってきた学生風の若い男のこと、アパートの隣の同性愛らしい中年女たちのこと。
だが、それらは、ながくは続かない。
いつの間にか自分の身の上話ということになった。思いだしたくもない話を光子は上京以来はじめて他人に話した。話していると、いままで心の奥底にしまわれていて自分でも忘れていたことが次々と掘りおこされてきた。
佑介は聞き上手だった。
光子は、ひとりで喋っていて、ふと気がついて、
「先生はアラビアン・ナイトの王様ね」
と言ったことがある。
「ほら、王妃さまが毎晩ベッドで話すでしょう。それで王様は殺すのを一日のばしにして……」
「誰が誰を殺すの」
「王様がお妃を。それまでに何人も殺しているの。だけど、そのお妃さまは、お話がうまかったから……」
「ああ、そうか。シェラザードのことだろう、君の言ってるのは……しかし、君は殺すほうじゃないの？〈人殺し女〉なんだろう君は」
「そうよ。〈火つけの家の人殺し女〉って言われていたのよ。十歳ぐらいなのに〈人殺しおんな〉なんて」
「どんな顔してた、その頃」
「同じことだわ、いまと。あんまり変らないみたい」
佑介は頷(うなず)いて光子の顔を見た。彼女の顔は、どこにも赤みがさしていなかった。そうやって間接光の照明の中



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

でベッドから半身をおきあがらせていると蒼白に見えた。
「君、眼が凄いと言われたことないか」
「ある。私の流し目、ゾッとするって子供のときに言われたわ。いくつだったかな。とにかく、ほんの子供なのに〈三十女の眼をしている〉なんて言った人がある」
(これで唇が薄ければ申しぶんなく酷薄な顔になるところだった)
と佑介は思いながら見ていた。
光子の唇は厚くぽってりとしていた。彼女の顔の中で、ただひとつ幼げなのが、そのふくらんだ唇だった。
首が細く、上半身がしまっているので痩せてみえるが、脚や腰には、その年頃として不足のないだけの充分な厚みがあった。
光子は二俣の奥、山明(やまあき)で生れた。山明は現在は天竜市に編入されているが、その頃は磐田郡山明村山明だった。
光子は小学校へあがったとき、もうすでに〈火つけの家の人殺し女〉であった。
火つけの家というのは確証のあることではない。九十六年前、山明他一村および山林四十三町歩を焼いた大きな山火事の火元が宮森家らしいという言い伝えがあるにすぎない。
それも、宮森家がこの地方一帯で五指に数えられる資産家であるため、人々は表だっては決してそんなことは言わなかった。
ましてや光子は分家の娘である。火つけの家というならば本家の息子たちこそ、そう言われるべきだった。
「しかたがないさ。君は、たしかに火でもつけそうな顔をしているからな。それに、君が火つけだと言っているわけじゃないんだから」
と佑介は言う。慰める口調ではなかった。
「からかわれている感じだわ。じゃあ、私は人を殺しそうな顔ですか?」
「殺しそう、じゃなくて、殺したんだろう。だから、そう言われるんだろう」
「そんな顔? 殺した顔? 私」
「だって、四つよ、私。何もおぼえていないわ。あたり

まえでしょ」
「そうかなあ」
「先生はおぼえていらっしゃるの」
「四つのときのことか。……うん、そうだ。ひとつ、あるな。夕立ちの中を誰かにおぶわれて走って行った。あれは誰だったろう、と時々考えるんだが。祖母ではない。母でもない。もちろん、父でもない」
「そうでしょう。あいまいなものだわ。もしかしたら、そんなこと、全然なかったのかも知れないし」
「ああ。しかし、それは君が人殺し女ではないという証明にはならないよ」
佑介はソファに座って、ホテルのバアから持ってきたウィスキーを飲んでいた。光子はベッドにうつぶせになり、上半身を佑介のほうへねじ曲げていた。
光子が返事をしなくなったので佑介が彼女のほうを見ると、光子は、その姿勢のままで動かなくなっていた。突然、その場へ固く凍りついてしまったような不自然さで、まばたきもしない。
やがて彼女は低い声で言った。
「私は生れたときから〈火つけの家の人殺し女〉だったんだわ。そういう顔をして生れてきたのね。……私には何もかも自分が生れる前のできごとだとしか思われないもの。生れる前に全部決定していたんだわ。私の知らないうちに。父のことも、母のことも」
「君は山明を憎んでいるんだな。……いや、そうじゃない。恋している。憎みながらも恋いこがれている」
「うそよ。うそよ」
光子は身ぶるいした。体の中を強い稲妻が駈け抜けた。
「君、帰れよ、山明へ」
発作のあとのように何度も深呼吸してから、ようやく光子は静かな低い声で言った。
「山明へ帰っても、もう肉親は、ひとりもいないんです。母は私が高校三年のときに死にました。それまでだって死んでいるのと同じことだったけれど。子供がふたり死んでからは、もう抜けがらだった。泣いて泣いて……眼を泣きつぶして盲になってしまって。そんなことって、あるかしら」
「あるんだろう。女親というものは子供と肉体的に結びついているから」

「私がいるのよ。私が残っているのよ。それなのに？」
佑介は黙って光子の顔を見ていた。
「私、母を憎んだわ。私がどうやって慰めようとしても無駄だったから」
光子の母は子供たちが死んだあと、仏壇のある奥の部屋から外へ出なくなった。
まだ母の眼の見えた頃のある日、光子がその部屋へ這入って行くと母は、いきなり立ちあがって光子を睨んだ。口をあけて荒く呼吸しながら光子のほうへにじり寄ってきて言った。
〈かえしておくれ。頼むから。なんでもみんなやるから。かえしておくれ。容子と正行をかえしておくれ〉
そういう形相にもかかわらず、気味の悪いほど低い猫撫で声だった。
光子は後ずさりしながら大声で言った。
〈イヤ〉
佑介に、その話をしながら、光子は、そのときの自分の、せいいっぱいの声の鋭さを思いだしていた。
「私に何が言えたというの。私のせいでもないのに」
「しかし君、イヤというのは明確な意志表示じゃないか。君は断ったんだろ」
「ええ。だって私のせいじゃないんですもの」
「もし君のせいなら返したというのか」
「いいえ。返してやるものか、と思った。母が憎くて憎くて。母は自分の子供はふたりだと思っていたにちがいないわ」
佑介は溜息をついたが何も言わなかった。
「私がこんなにひねくれたのは自分の気持ちが母には何も通じないとわかったときからだと思うの」
「そう？　ひねくれているの、君は」
「ちがいます？」
佑介は笑っただけだった。
「先生って、お父さんのような気がするときがあるわ。いいえ、私のお父さんってことじゃないんです。父は真面目一方の人でしたから」
「お父さんは？」
「死にました。姉と弟が死んでから二年あとに。自殺らしいの」
「……私は夢でしか知らないの、自分に姉や弟がいたということは。夢はね、よく見る。同じ夢を何度も」

そこは河岸らしい、ということしかわからない。一面に空色の花が咲いている。
「ふしぎなことに、その花の色が、だんだん濃くなって、紫色に近くなって、しかも光っているようなんです。すると、ふいに自分の左右の手に握っているものがなんであるかわかるの」
光子は佑介に右手を示した
「こちらの手の中に姉の指があって、左手のほうのは弟なの。弟の小さな指は、ちょっと湿っていて暖かく粘っているの、いつも。それがなぜかということも、私、知ってるんです。いままで飴を握りしめていたからなの」
光子は数秒、自分の左右の手に見いっていた。まるで、そうやって姉と弟の指の感触を思いだしてでもいるように。
それから、ベッドの上に身を倒した。彼女は、つかの間、隣りのベッドに腹這いになって煙草を吸っている佑介を忘れていた。
「どうして、私、ずっと握っていなかったのかしら。駄目なのね。気がつくと、もう、手の中には何もなくなっている」

眼の前を、ぼうぼうと白い靄が過ぎていく。その切れ間に、ちらっと姉の後姿が見える。姉は弟の手を引いている。彼らは白い着物を着て広い川の上を渉っていく。
「ねえ、先生、私のせいでしょうか。六歳の姉と三歳の弟が溺れ死んだのは……私のせいなの」
「そうではない、と言っても、そうだ、と言っても同じことだろう、君には」
「誰が言ったんでしょう。私が姉と弟が溺れるのを見ていた、なんて。私が突き落した、なんて」
「突き落したのか」
「いいえ」
「わからないんだろ？」
「……ええ」
「それじゃあ……」
「そうです。私、やったかも知れないわ。でも、とても仲がよかったんですって、私たち。いつ見ても三人で手をつないで歩いていたから山明の串団子って仇名があったくらいに。だから、私がそんなことを……」
「ふざけたのかも知れないだろう」
「先生」

「なんだ」
「泥酔中の殺人は無罪だって、本当？」
「ああ。未成年者もね。だから殺意があったところで君は無罪だし、また事実上、君は刑を受けてはいないんだから……」
「いいえ」
と光子は大声で叫んだ。
「私は受けています。私は自分が〈火つけの家の人殺し女だ〉ということを忘れたことはないわ」
光子は自分が酒に強いのか弱いのか、さっぱりわからなかった。少量でも酔う日もあり、いくら飲んでも酔わぬ日もあった。
他人に酔態を見せたことがないから、知合いの間では底なしだと思われている。
彼女は佑介と会った日は大抵ホテルの二階のバアで四、五杯、洋酒を飲んだが、酔うというほどではなかった。
ただ一回、徹底的に酔ってしまった日がある。
その日が佑介に会った最後だった。そしてまた、それまで漠然と考えていた帰郷への意志が決定的になった日でもあった。
もっとも、それが最後だなどとは彼女は思ってはいなかった。
今までと同じようにチンザノのロックを四杯飲んだあと、急に彼女は執拗になった。
「お代り」
と彼女は佑介の手を払って言った。あきれるような速さで五杯、たて続けに飲んだ。
そういうとき、佑介は、なだめたり、とめたりはしない。黙って見ていた。それから彼女を引きずりあげて部屋へ戻った。
もう光子の眼は開かなくなっていた。
「私があれだからなの。〈火つけの家の人殺し女〉だからなの。そうなんですか、先生。そうなのね、そうでしょ」
と光子は何回も言った。佑介の返事などは聞こうともしなかった。
ついに佑介が、
「馬鹿」

と怒鳴った。はじめてのことだった。
光子は薄く眼を開いた。
「先生、なぐらないの。どうしてよ。手のけがれなの。できないの。……先生。さあ、私を、ぶって。なぜ叩かないの」
「おれたちは通りすがりの通行人に過ぎないんだからな。叩いてもしようがないだろう。手が痛いだけさ」
「皆が私を見たわ、村では。私はつつかれ、こづかれて、いろいろ言われたわ。品評会に出された豚のようによ。私の体の恥しいことまで。どうして私だけがそうなの」
「君が他の女たちとちがっているから」
と佑介は言った。
「たとえば、美しすぎるものは、すべて畸型なのだ。君は魔女になるか、女王になるか二つに一つの道しかなかった。そして、いままでは異端の魔女だったのだ」
「いままでは？　そう。では、これからは？」
「わかっているだろう。もう決心しているはずだ」
そう言われたとき、光子は大きく身ぶるいした。彼女の体内を熱い戦慄が走り抜けた。
「ええ。わかってるわ。……私は私でいいんだってこと。〈火つけの家の人殺し女〉でいい。それなら、それらしく生きてやる。先生。私、帰ります」
その瞬間、彼女の目の前に山明の森と家と川が鮮やかに浮びあがったのだった。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.